

## 常識心理学と志向性実在論

村 若 修

### 1. 常識心理学

哲学も心理学も、人間の心についてどのような説明をすれば客観的知識として認めることができるのか、長い間悩んできた。20世紀の分析哲学と実験心理学は、同じ「行動主義」という名の下、主観的に内観される実在だと見做されてきた心的現象を、行動への傾向性あるいは刺激-反応関係へと還元しようとした。傾向性や関係は、それ自体で実在するものではない。行動主義によれば、心という実在を内観することはできず、ただ人は普通そう思い込んでいるだけなのである。しかしやがて、心がそれほど薄っぺらなものではないことが理解され始める。脳科学の進展もあって、内観主義とは別の道筋で、心の奥深さ、複雑さが説かれるようになる。コンピュータ・メタファーのおかげで、心/脳は情報処理システムとしても理解されるようになる。単純な刺激-反応関係ではなく、もっと複雑な関係が心を支配しているらしい。認知科学の発想は、およそこうして生まれてきた。

認知科学の基本原理は、心を「心的状態 (mental state)」と「心的過程 (mental process)」の概念を用いて説明することである。当初は、この過程を記号の計算過程と見做するのが主流であり、その場合には、状態と過程とはそれぞれ「心的表象」とその「操作」に対応する。しかし、いわゆる「内観 (introspection)」を全く無視して——それがふさわしくない呼称だとしても——心的表象や操作に内容を与えることは困難である。なぜなら、心という概念も含め、心的現象を記述するのは、内観報告の形をとる自然言語に他ならないからである。自然言語によって「心的」と呼ばれるものが、心の研究の出発点である。さらに、チョムスキーの言語理論の影響もあって、言語表象に似た記号表象が、あらゆる認知活動の基礎となる心的表象の姿ではないか、という考えが自ずと浮かんでくる。この考えに最も忠実な理論がJ. A. フォーダーの「思考の言語」(the Language of Thought) という仮説なのである。

「思考の言語」仮説は、われわれの自然言語にその形式ないし文法を求めるばかりではない。自然言語が心的現象を記述する語彙や論理にも忠実であろうとする。そのような心的現象を記述する常識の体系は今日、「常識心理学 (Commonsense Psychology)」, 「民間心理学 (Folk Psychology)」などと呼ばれている。例えば、われわれが日常、行動の説明に用いている推論には次のようなものがある。

- (A<sub>1</sub>) 身体の一部が切られたり、傷ついたり、火傷を負ったりすると、その人は痛みを覚える。
- (A<sub>2</sub>) 十分明るいところで赤いトマトを目前にすれば、その人は赤を知覚する。
- (A<sub>3</sub>) 長い時間水分をとらずにいと、その人は喉が渇きがちになる。
- (B<sub>1</sub>) 喉が渇けば、その人は何かを飲みたくなりがちである。
- (B<sub>2</sub>) 何か飲みたくなり、冷蔵庫に清涼飲料水があると信じていれば、その人は冷蔵庫の方へ行こうと意図する。

(B<sub>3</sub>) 命題Pを信じ、PならばQということを信じているならば、その人はQを信じがちになる。

(C<sub>1</sub>) ひどい痛みを覚えるならば、その人はたじろいだりうめいたりしがちになる。

(C<sub>2</sub>) どんな行為XとYについてもXを行うことに決め、YがXを行うための最善の方法だと信じていれば(しかも、Yを行うことができれば)、その人はYを行う。

(C<sub>3</sub>) 幸せならば、その人は微笑みがちになる。 (PACS, pp. 73 f.)

コンピュータ・メタファーを用いれば、A群は入力と内部状態の関係を、B群は内部状態相互の関係を、C群は内部状態と出力の関係を一般化した(擬似)法則である。常識心理学が「学」(すなわちロゴス)と呼ばれる理由は、それがこれら法則の体系と考えられるからである。そして、この体系がわれわれの心的表象のシステムを忠実に映し出している、というのが、「思考の言語」の含意である。

しかし、ここまで述べてきたことは、どこまで信じてよいのだろうか。常識心理学は果して来るべき心の科学の基礎を与えてくれるのだろうか。換言すれば、常識心理学は、われわれの心における情報処理を(部分的にせよ)忠実に表現しているのだろうか。

そこで本稿の目的は、常識心理学の性格づけの問題が、心的表象の理論にどのような形で反映されるかについて、概観することにある。われわれはまず、心的表象の理論の典型をフォーダーの「心の表象理論 (Representational Theory of Mind, R T M)」に求め、その概要を示す。次に、それ以外の理論の可能性を探る。R T Mも含めて心的表象の概念化、理論化の諸可能性はそれぞれ、常識心理学に対する態度を反映しているはずである。そこで最後に、心的表象の理論の背後にある、常識心理学へのいわば哲学的な態度を類型化する。それは、常識心理学が認知科学と呼ばれる分野とどのように関わるべきかについて、決定的な立場の相違を示すと思われる。

## 2. 心の表象理論 (R T M)

R T Mの核心は「思考の言語」の存在を要請するところにある。「思考の言語」とは「命題的態度の直接的対象としても、心的過程の領域としても機能する、『心的表象』の無限集合」のことである (PS, pp. 16-17)。フォーダーは、R T Mの主張を次のように定式化している。

主張1 (命題的態度の本性):

どんな有機体Oの、命題Pに対するどんな態度Aについても、以下のような、ある(「計算的」/「機能的」)関係Rとある心的表象MPが存在する。

MPはPを意味し、かつ

OがMPに対するRをもつとき、そのときにかぎり、OはAをもつ。

主張2 (心的過程の本性):

心的過程は心的表象トークンの因果系列である。<sup>(1)</sup>

(PS, p. 17)



主張1は、われわれが日常的に理解し使用している、命題的態度に関する報告の内容が、ほとんどそのままの形で心的状態として実在することを意味する。例えば、「私は、ソクラテスは醜いと信じている」という報告文は、〈ソクラテスは醜い〉という命題(P)を意味する心的表象トークン(MP)に対して、私(O)が特定の機能的関係(R)をもつとき、そのときにかぎり、私はその命題(P)を信じている(A)のである。つまり、これらの態度と心的表象が共に実在することが、「私は、ソクラテスは醜いと信じている」という報告が真であるための必要十分条件である。さらにこのことを比喩的に表現すれば、「ソクラテスが醜いと信じている」とは、「ソクラテスは醜い」と書いたカードが、「信念」というラベルの付いた箱の中に入っていることであり、心の中にカード(すなわち表象)と箱(すなわち態度)とが実在するのである。

主張2について。命題的態度は、命題を介して、さまざまな意味論的關係を結んでいる。意味論的關係とは命題の真偽(付値)に関わる関係である。形式的に区別すれば、意味論的關係には、心的表象が(タイプとして)意味している命題が、世界との間に結んでいる特殊な関係と、心的表象が(タイプとして)相互に結んでいる推論関係とがある。主張2は、そのような推論関係が心的状態の因果関係に重なることを意味しているのである。例えば、「雨になりそうだ、だから家の入ろう。」と考える場合、〈雨になりそうだ〉という命題を意味する心的表象が、〈家に入ろう〉という心的表象を生じる(cause)ことになる。この場合、それらの命題の間に一定の意味論的關係がある一方で、その命題を具体化している心的表象の間には、心的な因果関係が存在することになる。

一見直感に反するように思われる意味論的關係と心的因果関係との並行性は、コンピュータ・メタファーによって——例えばチューリング・マシンによって——馴染みやすいものとなっている。というのも、コンピュータ上での記号操作は一種の因果関係を示しているからである。一般的に言えば、記号は意味論の特徴と因果的特徴の両方を備えているのである。実在論者フォーダーにとっては、コンピュータ・メタファーはメタファー以上の意味をもっていると言えよう。

さて、RTMと常識心理学の関係はどのようなものであろうか。素朴に理解すれば、RTMは常識心理学に基づいて立てられているように見える。主張1は「常識的な志向性実在論 (commonsense Intentional Realism)<sup>(2)</sup>」をよく反映しているし、主張2は常識心理学の法則を表現するのに役立つように見える。しかし、厳密に言えば、RTMが心理学理論であるために、常識を根拠とする必要はないであろう。その場合には、常識心理学以外に根拠を求め、さらに、なぜ偶然にもRTMと常識とが重要な点で一致しているのか、立証しなければならない。その立証責任を果たせば、必ずしもRTMは常識心理学と直結していなくてよいのである。しかし、たいていの実在論者は「常識的な志向性実在論」を支持するであろう。だとすれば實際上、常識的な実在論はRTMを採用するために不可欠な要素である。

RTMの二つの主張は、いずれも常識や直観を下敷にした強力なものである。しかし、理論的な見地からすれば、最終的にRTMを支えるべきものは、RTMを証拠立てるさまざまな経験的事実や実験結果である。この方向での検討は、経験科学の手法で行われなければならないし、現に行われている。他方、再度RTMを動機づけている常識について反省することも、RTM以外の可能性を探る上では有効であろう。これは、RTMをア prioriに否定するということではない。一旦経験的検証に耐える理論が作られたならば、それを直観に反するという理由で退けることはできない。むしろ、哲学的思考が意

味をもつとすれば、有力な理論の存在によってかえって隠されてしまう素朴な疑問に改めて光を当てること、そしてその疑問を合理的に解決できるような別の理論的枠組みを示してみせることであろう。本稿は、そのための予備考察に当たる。

フォーダー自身、自説以外の可能性について十分に配慮している。しばらく彼の案内に従って、他の可能性を概観しながら、われわれの進むべき方向を模索しよう。

### 3. 標準的实在論 (SR)

フォーダーは、読者が順にイエス／ノー・クイズに答えながら自分の立場を決定できるような、ユニークな論文を書いている。それが、「フォーダーの心的表象ガイド」である。この論文ではRTMが最終到達点になるが、われわれはRTMを出発点にとったのだから、この論文を逆に辿ることにしよう。

フォーダーは4つある質問のうち第3問で、「命題的態度は単子的な (monadic) 機能的状態か？」と問うている。命題的態度は、その原義からして命題に対する態度であり、命題への関係である。したがって、自然言語の構造を参照するかぎり、命題的態度は命題と態度 (志向性一般に即して言えば、対象と心的関係) という二つの独立した部分から成るはずである。例えば、「私は、ソクラテスは醜いと信じている」については、〈ソクラテスは醜い〉という状態と信じているという状態とに分析できる。この意味では、命題的態度は単子的で分析不可能なものではなく、複合子的 (polyadic) で分析可能なものである。RTMの主張1はこのことをよく表している。ところが、「標準的实在論 (Standard Realism, SR)」と彼が呼ぶ立場では、態度と命題の間の「関係」の概念が不明確であることを理由に、命題的態度はそれ以上分析できない単子的な機能的状態であると見做されるのである。

このような相違にもかかわらず、SRとRTMには重要な共通点がある。それらの単子的な機能的状態の相互関係 (推論関係) は同時に、心的状態の因果関係をも示しており、その (現実的・可能的) 関係の全体を一般化すれば、因果的相互作用のネットワークが形成できる。つまり、このネットワークは、一方で心的状態の因果的相互作用を示し、他方で態度の対象となる命題間の論理的関係を示していると考えられる。SRのこの考え方は、細部を除きRTMの主張2と同主旨のものである。

命題的態度の因果的役割は、その態度の対象となる命題の意味論的役割を映している。

(FGMR, p. 86)

このように、因果ネットワークを推論ネットワークの同型性 (isomorphism) を主張する点では、SRはRTMと近接している。両者の根本的な相違は、上述した第3問に対する答え方である。

ここで、RTMが命題的態度を複合子的と見做し、SRがそれを単子的と見做すことについて、どちらが正しいかを論証するつもりはない。この第3問に対する答えとわれわれの常識の関係が重要である。われわれは実際、〈鹿児島は美しい街である〉という同じ命題内容について、それを信じることも欲することも、場合によっては危惧することもできる。そのとき、われわれは同じ命題内容に異なった態度をとっていると感じるだろう。なぜなら、自然言語がそのような構造を持っているからである。RTM



はこうした常識をそのまま反映している理論であると言える。しかも、命題的態度の報告文の内容が、忠実に心的状態を指示しているとする点で、RTMは、命題的態度に関する最も素朴な実在論によって動機づけられていると理解してよいであろう。それを具体的に示しているのが「思考の言語」仮説である。これに対して、SRはこの仮説を完全な形では受け入れない。なぜならSRは、同じように命題的態度に関する実在論でありながら、それが単子的であると考えることによって、自然言語と心的状態との対応関係を半ば放棄してしまっているからである。

#### 4. 現象学

RTMとSRの立場の違いは、前者が命題的態度を分析可能と見るのに対して、後者はそれをそれ以上分析できない単子と見るところにある。これを自然言語における心的表現、したがって常識のもつ心的概念に照らせば、SRは必ずしもそれらを忠実に反映していないと言える。しかしまたRTMでさえ、それが科学的理論を構成するためには、常識からの逸脱は避けられないであろう。したがって、理論と常識との間の見かけの距離は、理論の正当化に影響を与えるものではない。ただ忘れてならないのは、RTMもSRも、命題的態度をあくまで心的実在として取り扱おうとしているということである。それはまた、常識心理学を単なる動機づけ以上のものと見做している証拠でもある。

命題的態度に関する実在論は志向性実在論とも呼ばれる。「志向性 (intentionality)」と言えば、その研究の主流はドイツを中心とする「現象学 (Phenomenology)」である。主観的な意識経験の記述を中心とするその手法は英米哲学にも影響を与え、言語分析の手法と現象学的手法を混合した独特の現象学派を生み出している。その代表格はJ. サールとH. L. ドレイファスであろう。タイプは異なるが、両者とも志向性実在論者であることは論を俟たない。ただし、彼らは志向性がRTMのような仕方で定式化できるものとは考えない。RTMはそもそも認知科学の基礎理論として登場した。したがって、いわゆる「心の計算理論 (computational theory of mind, CTM)」とRTMとは表裏一体なのである。現象学派にとって、志向性が記号の計算過程と同一視できるとは思いもよらないことである。

より詳しく述べれば、現象学がRTMを認めないのは、心についての機能主義的な理解を原理的に認めないからである。「機能主義 (functionalism)」とは、心を「機能 (function)」または「関数 (function)」として捉える立場であり、ある機能をもっていれば、その機能を実現している物質が何であれ、その物質は心をもつとする立場である。しかも、機能主義は心的因果性を物理的に実現する方法を、計算理論によって具体的に提示している。これに対して、現象学派は、機能とそれを実現する物理的性質との分離を認めない。特に、意識現象を高等生物以外のものに——例えばコンピュータには——認めようとしない。しかも、心身問題は、現象学ではあくまで意識現象の「記述 (description)」に基づいて解決が図られているようである。科学的「説明 (explanation)」と現象学的「記述」の間には初めから方法論的な溝があるように思われる。

例えば、機能主義に対する批判として、現象学的哲学者は「感覚質 (qualia)」の存在を挙げる。主観的経験の質は、現象学的な志向性の概念にとって重要な契機なのである。ところが、フォーダーら機能主義者は、さしあたりこの問題を無視せざるを得ない。実際、認知科学は、方法的に意識の質の問題

を最後まで棚上げにしておく他はないのではなからうか。(もっとも、意識を機能主義的に「説明」する努力はなされている。) このように、機能主義と現象学の調停は非常に困難であり、『ガイド』では、「機能主義についてどう思うか?」という第2問によって、志向性実在論は現象学と機能主義とに判然と区別されているのである。

## 5. 命題的態度に関する反実在論

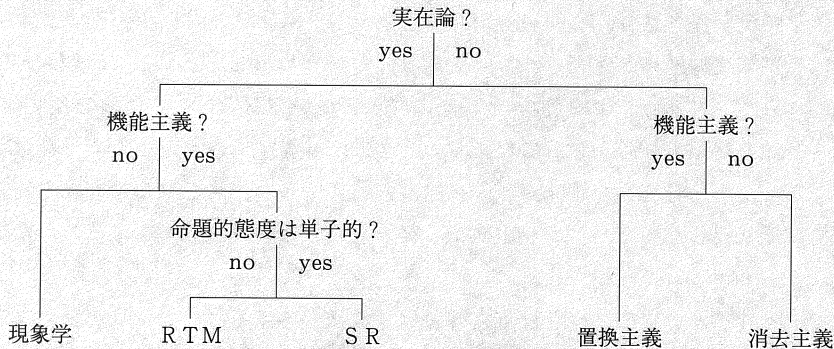
「反実在論 (Anti-realism)」にもさまざまなタイプがある。しかし、それらに共通している点は、物理主義を前提としていること、科学的説明を目的としていることであろう。この二点は、RTMやSRの立場とも共通であり、反実在論は、先に述べた現象学派よりもRTMとSRに近いと言える。

「物理主義 (physicalism)」に目を向けてみよう。物理主義とは「心的過程は物理過程である」という立場である。この意味では、フォーダーも物理主義者である。特に、心を脳と同一視する場合、物理主義は「心-脳同一説」と呼ばれる。しかし、心的過程が物理過程、脳過程であるとしても、心的過程固有の論理が、例えば神経生理学といった物理科学に還元できるかどうかは疑問である。そこで、物理主義はさらに、「還元主義 (reductionism)」と「非還元主義 (nonreductionism)」に区別される。これらについて、命題的態度を例にとって説明しよう。命題的態度に関する実在論または志向性実在論は、命題的態度を理論にとって不可欠な基本概念として取り入れる。しかし、還元主義は理論の中で命題的態度という概念を用いない。命題的態度は別のより基本的な概念、つまり物理的な概念に還元されてしまうのである。

しかしさらに、還元主義を徹底させた立場として、「消去主義 (eliminativism)」がある。それは単に科学の問題として、心的概念を物理的概念に還元するだけではなく、日常使用される心的言語まで物理的言語に還元しようとする立場であり、いわば常識心理学全体の死を意味している。消去主義者の代表はP.M.チャーチランド、P.S.チャーチランドである。また、消去主義を主張しない、より穏健な還元主義者としては、S.スティッチがいる。スティッチは、心的状態が何らかの機能的状態であるとしながら、信念や欲求を基本概念とする命題的態度の理論には否定的である。したがって彼は、常識心理学を洗練された機能主義心理学に置き換えようとするのである。これは一種の還元主義であると思われるが、フォーダーはその点について「還元よりも置換 (replacement)」であると説明している (FGMR, p. 83)<sup>(3)</sup>。われわれもこの言葉を尊重して、この立場を「置換主義」と呼んでおこう。なお、フォーダーの『ガイド』では、チャーチランドらとスティッチとの相違は、機能主義者かどうかという点に求められており、ここで紹介した物理主義の区別は副次的に取り扱われている。いずれにせよ、反実在論者たちは、科学的説明という目的にとって、「常識心理学には何かまずいところがある」 (CSN, p. 172)、ないし「志向的なものには何か内在的にまずいところがある」と考えているのである (FGMR, p. 83)。

われわれは一応、フォーダーのガイドブックを手に、後ろのページから道を辿ってきた<sup>(4)</sup>。下の図は、これまで述べた関係をフォーダーに倣ってまとめたものである。次節では、常識心理学への態度という点から、これらの立場の相違を明らかにしよう。





## 6. 常識心理学の位置づけ

便宜上、これまで述べてきた立場を「实在論」、「反实在論」、「現象学」に区別して考えたい。現象学も实在論に含まれていたが、ここでは機能主義的实在論だけを「实在論」と呼ぶことにする。また、現象学が対象とすべき主観的な意識経験を「心的現象」と呼び、それに関する常識的な記述や説明を「言語報告」と呼ぶ。また、心理学（心の科学）が対象とすべき実在的状态を「心的状態」と呼ぶことにする。

現象学は一般に、心的現象の記述に基礎を置いている。現象学は、それらの記述の中に新たな真理を発見する営みであると言ってもよいであろう。そこには、われわれの「常識 (common sense)」の構造が反映されていることは疑いえない。しかし、あらゆる偏見を取り去って、この常識を揺るぎない真理の体系とすることが現象学の目的である。このように理想化された常識は、全く恣意的性格をもたない。われわれの「私的 (private)」で生き生きとした経験は、そのまま言語によってすくいとられるものなのである。<sup>(5)</sup>

实在論は常識を出発点とする。常識は自然言語によって構成されており、もとより「公共的な (public)」性格を帯びている。实在論は、「心的現象」の質的な——現象学的な意味での——实在性を認めながらも、その本質が言語化されるのではなく、逆に公共的な言語が私的経験を分節化、範疇化すると考える。私的経験を言語によって報告できるのは、予め心的言語が公共的に存在するからなのである。その証拠に、常識心理学は直接に経験できる自分の心的現象ばかりでなく、他人の心的状態にも適用している。ここではすでに、「言語報告」は主観的経験の表現ではない。むしろあらゆる「心的状態」の指示表現である。このようにして、实在論は現象学から離れることができる。

实在論は、常識心理学が何か実在的な心的状態を表現しているという立場である。しかし一方で、その心的状態はもはや主観的に意識されていなくてもよい。例えば、命題的態度を示す心的状態が意識化されないまま存在していても構わない。したがって、常識心理学の概念（例えば「信念」や「欲求」）が、より洗練された理論の中で用いられるという事実が最も重要なことである。さらに、实在論は、機能主義、計算主義によって非還元主義的な物理主義をとるので、一方で機能的状態相互の因果関係をも理論に取り入れなければならない。R T M を例にとれば、特に主張 2 にその二面性が表れている。つまり、「心的過程は心的表象トークンの因果系列である」と。ここで、心的過程が因果系列であることに

よって心的な因果関係が保証され、心的過程が心的表象をトークン化（個別記号化）していることによって、表象における意味論的過程が保証されるのである。われわれは日常的に、われわれの心が言語の「意味」というものによって動かされ、世界と言語の関係について真偽という価値を用いて評価しながら生活していると知っている。しかし、これまでの科学は、心理学でさえ、そのような意味論を射程に入れたことがなかった。一見奇妙な意味論と因果論との結びつきが、RTMのような心的表象の理論によって、初めて可能になったのである。RTMやSRの危うさと魅力は、まさにこの点に集約されている。

これに対してチャーチランドのような反実在論者は、常識が与えるヒントに耳を貸さない。心の研究のプログラムは徹底して還元主義的である。スティッチはむしろフォーダーらの考えに近いとも言えるが、常識心理学に対する懐疑はやはり強い。反実在論は、心的状態の定義に、常識心理学の概念を必要としないのである。

以上から、実在論がとっている道が、現象学と反実在論の中間にあり、意味論的な世界観と、因果論的な世界観とを総合する道であることが明らかになる。しかし、この総合は本当に可能なのであろうか。一方でこの問題は経験的に確かめられるべき問題であろう。しかし、RTMそのものに内在する難点もあるように思われる。そこで、ここまでの分類とは別の観点から、新たな道を示唆して本稿の結論に代えたい。

## 7. 常識心理

第1節で例示したような法則が学的体系を示すという発想、つまりそれらが「常識心理学」を成すという発想が定着して以来、この体系が実在することは自明のごとく語られてきた。一度この点が受け入れられれば、この体系が真であるか偽であるかという問いが、われわれに答えを迫ることになる。そして、その答え方によって、われわれは必然的に実在論者と反実在論者へと振り分けられるのである。

しかし、そもそもそんな体系が存在しないとすれば、われわれは全く別の問題に向かわなければならない。確かに、われわれは自分の行為や他人の行為を、心的言語を使って説明する。その際、その都度もっともらしい疑似法則を用いている。「こう思ったからこうした」、「こうしたくて、そのためにはああすることが必要だと思ったからしたんだ」など。典型的な信念と欲求の心理学は、われわれが自らを合理的行為者だと思込ませてもらえる説得力がある。しかし、われわれが行為に際して意識上で表象していることがらは、本来雑多で收拾がつかないものではないのか。そのような例をボグデンが挙げている。

私が早足になり、空を見上げ、傘に手をかけるという事実を基に、あなたが私に〈雨が降りそうだ〉という信念を帰するとしよう。あなたがこのように信念を帰するのはもっともである。しかし、言わせてもらえば、私はその他たくさんのことを心と身体で同時に行っている。それらをあなたは知らないだろう。実際、このじめじめした気まぐれな街の雨には慣れっこになっているので、情報は「コンパイル」されていて、その明示的表象はもう作っていないのである。私はもっと価値ある



関心事のためにデータ・スペースを空けている。だから私は、同時に他のたくさんのことをしながら、ただ自動的に早足になり、傘に手をかけている。[中略] あなたが私に帰する信念（私の行動を説明する情報）は、私と世界が与える情報の細片や断片（bits and pieces）から、あなたが再構成した結果である。あなたは、豊富な全体を単純化し、融合し、要約している。明らかに、私は私のデータを、あなたが私に帰するとされた情報の形式ではコード化しない。私はあなたの手中にある情報ツールに過ぎないのである。<sup>(3)</sup> (CSN, pp. 177-178)

英米の哲学者の常として、分析は三人称的な事例で始まる。他人に信念や欲求を帰する場合を考えるのである。この例を見るかぎり、少なくとも他人に命題的態度を帰する場合、それは態度を帰する側の恣意的な再構成によるものである。したがって、常識心理学は必ずしも実在の心的状態を指示しないと云えるであろう。しかし、一人称的な事例に、同じことが当てはまるであろうか。自然言語による報告が、予め公共的性格を帯びていることは指摘しておいた。したがって、自分の行為の説明についても、それが他人への報告という形を典型とする以上、多くの雑多な事柄を省略して、単純化、要約されているはずである。

以上のことから、常識心理学とは何かという根本問題に対する示唆が与えられる。常識心理学はおそらく、実在する心的状態を忠実に描き出すための理論的体系ではない。それはいわば説明のための説明である。われわれは説明という実践のために常識を用いている。ボグダンによれば、それは「常識心理学 (Commonsense Psychology)」ではなく、ロゴスなき「常識心理 (Commonsense Psyche)」であって、科学に比せられるような理論体系を成してはいないのである。

常識のありのままの姿を示し、それが理論的であるよりも実践的であるということが示されたことの意義は大きい。この立場は（この局面では）反実在論的であるが、だからといって常識の有効性を疑うわけではないからである。常識心理は実践のための能力として、認知的に重要な意味を持つてくるはずである。<sup>(6)</sup>

しかし、ボグダンの発想を鵜呑みにすれば、科学的心理学と常識心理は離ればなれになってしまう。仮に心理学が反実在論的に、志向性を基本概念としないで展開するならば、意味論を因果性と結びつけようとする研究プログラムは失敗に終わることになる。逆に、心理学が何らかの仕方で「科学的な志向性実在論」として意味論を射程に入れるにしても、それは「常識的な志向性実在論」を否定したのだから、なぜ科学と常識が偶然にも一致し、ともに成功を収めるのかが、理解できなくなる。

これらの問題は今後に残されざるをえない。最後に、一つの打開策を示唆すれば、常識心理学ないし常識心理と呼ばれるものの中で、理論的要素と実践的要素とを区別し、前者によって常識的な志向性実在論を擁護しながら、後者によって常識心理の実践的側面を解明することも考えられる。常識心理（学）の全体像を正視することがいづれにせよ必要である。

## 注

- (1) 表象トークンとは、あるタイプの表象（表象タイプ）を具体化している個々の表象のことである

る。なお、訳語「心的表象トークン」は、‘tokenings of mental representations’の意識であり、直訳すれば「心的表象のトークン化（個別記号化）」となるであろう。

- (2) 命題的態度に関する実在論は、このように「志向性実在論」とも呼ばれる。もっとも、志向的關係は命題的態度に限られないとする立場もあるので、必ずしも正確な命名ではないが、簡便のためこの名を用いる。
- (3) 下線部は、原語でイタリック表記になっている箇所である。
- (4) 『ガイド』によればさらに、反実在論としてデネットの「道具主義 (Instrumentalism)」が挙げられているが、フォーダーの説明からも窺えるように、道具主義は実在論に対して微妙な立場にある。また、われわれの方向を見極める上でもこの立場は重要であり、デネットの道具主義については稿を改めて取り扱いたいと思う。
- (5) ここで示した現象学の立場には、いささか誇張が含まれている。というのは、機能主義的実在論の理解には、このような理念型としての現象学と対比させることが有効だと考えたからである。
- (6) ボグダン は、ここで述べたように、「常識的な志向性実在論」を否定するが、一方で常識心理学に依存しない形での「志向性実在論」を目指している。例えば彼は次のように言う。

われわれの表象の内在的志向性は、常識が明らかにし説明するものではない……。常識が帰する内容は、われわれのデータ構造と過程との志向性を装っている (assume)……。

(CSN, p. 182)

文献表 (引用文献および参照文献。引用したものには最初に略号を付した。)

<J, A. Fodor の著作>

*The Language of Thought*, (Thomas Y. Crowell, 1975).

“Methodological solipsism considered as a research strategy in cognitive science”, *Behavioral and Brain Sciences*, 3, (1980).

[FGMR], “Fodor’s guide to mental representation”, *MIND*, Vol. XCIV, No. 373, (1985).

[PS], *Psychosemantics: the Problem of Meaning in the Philosophy of Mind*, (MIT Press, 1987).

<その他>

[CSN], Bogdan, J. R., “Common sense naturalized”, Bogdan(ed), *Mind and Common Sense*, (Cambridge U. P., 1991).

Churchland, P. M., *Scientific Realism and the Plasticity of Mind*, (Cambridge U. P., 1979).

Dreyfus, H. L., *What Computers Can’t Do*, revised edition, (Harper & Row, 1979).

[PACS], Goldman, A. I., *Philosophical Applications of Cognitive Science*, (Westview Press, 1993).

Loewer, B. & Rey, G., *Meaning in Mind: Fodor and His Critics*, (Blackwell, 1991).

Searle, J. R., “Minds, Brains, and Programs”, *Behavioral and Brain Sciences*, Vol. 3, No. 3, (1980).

Stich, S. P., *From Folk Psychology to Cognitive Science*, (MIT Press, 1983).

土屋俊, 『心の科学は可能か』(東京大学出版会, 1986)。